

宮澤賢治

狼森と
笊森
盜森

狼オイノ森もりと
笊ざる森もり盜ぬす森もり

こいわいのうじょう
 小岩井農場の北に、黒い松の森が四つあります。い
 ちばん南が狼森オイノもりで、その次が笹森ざさもり、次は黒坂森くろさかもり、北の
 はずれは盗森ぬすともりです。

この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体な名前がついたのか、それを一ばんはじめから、すっかり知っているものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかの巨きな岩が、ある日、いばってこのお話をわたくしに聞かせました。

ずうっと昔、岩手山が、何べんも噴火しました。その灰でそこらはすっかり埋まりました。このまっ黒な大きな岩も、やっぱり山からはね飛ばされて、今のところに落ちて来たのだそうです。

噴火がやっとしずまると、野原や丘には、穂のある草や穂のない草が、南の方からだんだん生えて、とうとうそこら一ぱいになり、それから柏かしわや松も生え出し、しまい、いまの四つの森ができました。けれども森にはまだ名前もなく、めいめい勝手に、おれはおれだと思っ
ているだけでした。するとある年の秋、水のようにつめ

たいすきとおる風が、柏の枯葉をさらさら鳴らし、岩手山の銀の冠には、雲の影がくつきり黒くうつついている日でした。

四人の、けらを着た百姓たちが、山刀なたや三本鍬さんぼんぐわや唐鍬とうぐわや、すべて山と野原の武器を堅くからだにしばりつけて、東のかどばった燧石ひうちいしの山を越えて、のっしのっしと、この森にかこまれた小さな野原にやって来ました。よくみるとみんな大きな刀もさしていたのです。

先頭の百姓が、そこらの幻燈のようなけしきを、みんなにあちこち指さして

「どうだ。いいところだろう。畠はすぐ起せるし、森は近いし、きれいな水もながれている。それに日あたりもいい。どうだ、俺はもう早くから、ここときめておいたんだ。」と言いますと、一人の百姓は、

「しかし地味ちみはどうかかな。」と言いながら、かがんで一本のすすきを引きぬいて、その根から土をてのひら掌てのひらにふるい落して、しばらく指でこねたり、ちよつとなめてみたりしてから言いました。

「うん。地味もひどくよくはないが、またひどく悪くもないな。」

「さあ、それではいよいよよこときめるか。」
も一人が、なつかしそうにあたりを見まわしながら言
いました。

「よし、そうきめよう。」今までだまって立っていた、
四人目の百姓が言いました。

四人はそこでよろこんで、せなかの荷物をどしんとお
ろして、それから来た方へ向いて、高く叫びました。

「おおい、おおい。ここだぞ。早く来^こお。早く来^こお。」
すると向うのすすきの中から、荷物をたくさんしよつ
て、顔をまっかにしておかみさんたちが三人出て来まし

た。見ると、五つ六つより下の子供が九人、わいわい言
いながら走ってついて来るのでした。

そこで四人の男たちは、てんでにすきな方へ向いて、
声をそろえて叫びました。

「ここへ畠起してもいいかあ。」

「いいぞお。」森が一せいにこたえました。

みんなはまた叫びました。

「ここに家建ててもいいかあ。」

「ようし。」森は一ぺんにこたえました。

みんなはまた声をそろえてたずねました。

「ここで火たいてもいいかあ。」

「ようし。」 森は一ぺんにこたえました。

みんなはまた叫びました。

「すこし木もらってもいいかあ。」

「ようし。」 森は一せいにこたえました。

男たちはよろこんで手をたたき、さつきから顔色を変えて、しんとしていた女や子供らは、にわかにはしやぎだして、子供らはうれしまぎれに喧嘩をしたり、女たちはその子をぽかぽか撲なぐったりしました。

その日、晩方までには、もう萱をかぶせた小さな丸太

の小屋が出来ていました。子供たちは、よろこんでそのまわりを飛んだりはねたりしました。次の日から、森はその人たちの気違いのようになって働らいているのを見ました。男はみんな鍬をピカリピカリさせて、野原の草を起しました。女たちは、まだ栗鼠りすや野鼠のねずみに持って行かない栗の実を集めたり、松をきって薪たきぎをつくったりしました。そしてまもなく、一めんの雪が来たのです。

その人たちのために、森は冬のあいだ、一生けんめい、北からの風を防ふせいでやりました。それでも、小さな子供らは寒がって、赤くはれた小さな手を、自分の咽喉にあ

てながら、

「冷たい、冷たい。」と言つてよく泣きました。

春になつて、小屋が二つになりました。

そしてそばと稗ひえとがまかれたようでした。そばには白い花が咲き、稗は黒い穂を出しました。その年の秋、穀物がとにかくみのり、新らしい畠がふえ、小屋が三つになったとき、みんなはあまりうれしくて大人までがはね歩きました。

ところが、土の堅く凍こおった朝でした。九人の子供らのなかの、小さな四人がどうしたのか夜の間に見えなくな

っていたのです。

みんなはまるで、気違いのようになって、その辺^{へん}をあちこちさがしましたが、子供らの影も見えませんでした。そこでみんなは、てんでにすきな方へ向いて、一しよに叫びました。

「たれか童^{わらし}やど知らないか。」

「知らない」と森は一せいにこたえました。

「そんだらさがしに行くぞお。」とみんなはまた叫びました。

「来^こお。」と森は一せいにこたえました。

そこでみんなはいろいろの農具をもって、まず一番ちかい狼オイノもり森に行きました。森へはりますと、すぐしめつたつめたい風と朽葉くちばの匂とが、すつとみんなを襲いました。

みんなはどんどん踏みこんで行きました。

すると森の奥の方で何かパチパチ音がしました。

急いでそっちへ行ってみますと、すきとおったばら色の火がどんどん燃えていて、狼が九匹、くるくるくるくる火のまわりを踊ってかけ歩いているのでした。

だんだん近くへ行ってみると、いなくなつた子供らは

四人とも、その火に向いて焼いた栗や初茸はつたけなどをたべていました。

狼はみんな歌を歌って、夏のまわり燈籠のように、火のまわりを走っていました。

「狼森のまんなかで、

火はどろどろばちばち

火はどろどろばちばち、

栗はころころばちばち、

栗はころころばちばち。」

みんなはそこで、声をそろえて叫びました。

「狼^{オイノ}どの狼^{オイノ}どの、童^{わらし}やど返して呉^けろ。」

狼はみんなびっくりして、一ぺんに歌をやめて口をまげて、みんなの方をふり向きました。すると火が急に消えて、そこらにはわかにか青くしいんとなつてしまったので、火のそばの子供らはわあと泣き出しました。

狼は、どうしたらいいか困ったというように、しばらくくきよろきよろしていました。とうとうみんな一どに森のもっと奥の方へ逃げて行きました。

そこでみんなは、子供らの手を引いて、森を出ようと思いました。すると森の奥の方で狼どもが、

「悪く思わないで呉^けろ。栗だのきのこのだの、うんとご馳走したぞ。」と叫ぶのが聞えました。みんなはうちに帰ってから栗餅^{あわもち}をこしらえてお礼に狼森へ置いて来ました。

春になりました。そして子供が十一人になりました。馬が二匹来ました。畠には、草や腐った木の葉が、馬の肥^{こえ}と一しよに入りましたので、粟や稗はまっさおに延びました。

そして実もよくとれたのです。秋の末のみんなのよろこびようといったらありませんでした。

ところが、ある霜柱のたつたつめたい朝でした。

みんなは、今年も野原を起して、畠をひろげていた。たので、その朝も仕事に出ようとして農具をさがしますと、どこの家にも山刀も三本鍬も唐鍬も一つもありませんでした。

みんなは一生けんめいそこらをさがしましたが、どうしても見つかりませんでした。それで仕方なく、めいめいすきな方へ向いて、一しよにたかく叫びました。

「おらの道具知らないかあ。」

「知らないぞお。」と森は一ぺんにこたえました。

「さがしに行くぞお。」とみんなは叫びました。

「来お。」と森は一せいに答えました。

みんなは、こんどはなんにも持たないで、ぞろぞろ森の方へ行きました。はじめはまず一番近い狼森に行きました。すると、すぐ狼が九匹出て来て、みんなまじめな顔をして、手をせわしくふって言いました。

「無い、無い、決して無い、無い。ほかをさがして無かったら、もう一ぺんおいで。」

みんなは、もつともだと思って、それから西の方のぎるもり笹森に行きました。そしてだんだん森の奥へはいつて行きま

すと、一本の古い柏の木の下に、木の枝であんだ大きな
筧が伏せてありました。

「こいつはどうもあやしいぞ。筧森の筧はもつともだが、中には何があるかわからない。一つあけて見よう。」

と言いながらそれをあけて見ますと、中には無くなつた農具が九つとも、ちゃんとはいつていました。

それどころではなく、まんなかには、黄金きんいろの目をした、顔のまっかな山男が、あぐらをかいて坐っていました。そしてみんなを見ると、大きな口をあけてバアと言いました。

子供らは叫んで逃げ出そうとしましたが、大人はびくともしないので、声をそろえて言いました。

「山男、これからいたずら止めて呉^けろよ。くれぐれ頼むぞ、これからいたずら止めて呉^けろよ。」

山男は、大へん恐縮したように、頭をかいて立っておりました。みんなはてんでに、自分の農具を取って、森を出て行こうとしました。

すると森の中で、さっきの山男が、

「おらさも粟餅持って来て呉^けろよ。」と叫んでくるりと向うを向いて、手で頭をかくして、森のもっと奥へ走っ

て行きました。

みんなはあつはあつはと笑って、うちへ帰りました。そしてまた粟餅をこしらえて、狼森と筑森に持って行って置いてきました。

次の年の夏になりました。平らなところもうみんな畠です。うちには木小屋がついたり、大きな納屋が出来たりしました。

それから馬も三匹になりました。その秋のとりいれのみんなのよろこびは、とても大へんなものでした。

今年こそは、どんな大きな粟餅をこさえても、大丈夫

だとおもったのです。

そこで、やっぱり不思議なことが起りました。

ある霜の一面におりた朝、納屋のなかの粟が、みんな無くなっていました。みんなはまるで気が気でなく、一生けん命、その辺を駆けまわりましたが、どこにも粟は、一粒もこぼれていませんでした。

みんなはがっかりして、てんでにすきな方へ向いて叫びました。

「おらの粟知らないかあ。」

「知らないぞお。」 森は一ぺんに答えました。

「さがしに行くぞ。」とみんなは叫びました。

「来お。」と森は一せいに答えました。

みんなは、てんでにすきなえ物を持って、まず手近の狼森に行きました。

狼共は九匹とももう出て待っていました。そしてみんなを見て、フツと笑って言いました。

「今日も粟餅だ。ここには粟なんか無い、無い、決して無い。ほかをさがしても無かったらまたここへおいで。」
みんなはもっと思つて、そこを引きあげて、今度は笹森へ行きました。

すると赤つらの山男は、もう森の入口に出ていて、にやにや笑って言いました。

「栗餅だ。栗餅だ。おらはなつても取らないよ。栗をさがすなら、もっと北に行つて見たらよかべ。」

そこでみんなは、もつともだと思つて、こんどは北の黒坂森、すなわちこのはなしを私に聞かせた森の入口に来て言いました。

「栗を返して呉ろ。栗を返して呉ろ。」

黒坂森は形を出さないで、声だけで答えました。

「おれはあけがた、まっ黒な大きな足が、空を北へとん

で行くのを見た。もう少し北の方へ行つて見ろ。」

そして粟餅のことなどは、一言も言わなかつたそうです。そして全くその通りだつたらうと私も思います。なぜなら、この森が私へこの話をしたあとで、私は財布からありっきりの銅貨を七銭出して、お礼にやったのでしたが、この森は仲々受け取りませんでした。このくらいきしやう気性がさつぱりとしていますから。

さてみんなは黒坂森の言うことがもつともだと思つて、もう少し北へ行きました。

それこそは、松のまっ黒なぬしごもり盗森でした。ですからみ

んなも、

「名からしてぬすと臭い。」と言いなながら、森へ入って行つて、

「さあ粟返せ。粟返せ。」とどなりました。

すると森の奥から、まっ黒な手の長い大きな男が出て来て、まるでさけるような声で言いました。

「何だと。おれをぬすとだと。そう言うやつは、みんなたたき潰してやるぞ。ぜんたい何の証拠があるんだ。」

「証人がある。証人がある。」とみんなは答えました。

「誰だ。ちくしように、そんなこと言うやつは誰だ。」盗

森は咆ほえました。

「黒坂森だ。」と、みんなも負けずに叫びました。

「あいつの言うことはてんであてにならん。ならん。ならん。ならんぞ。ちくしょう。」と盗森はどなりました。

みんなももつともだと思ったり、恐しくなったりしてお互に顔を見合せて逃げ出そうとしました。するとにかに頭の上で、

「いやいや、それはならん。」と言うはつきりしたおごそ厳かな声がしました。

見るとそれは、銀の冠をかぶった岩手山でした。盗森

の黒い男は、頭をかかえて地に倒れました。

岩手山はしずかに言いました。

「ぬすとはたしかに盗森に相違ない。おれはあけがた、東の空のひかりと、西の月のあかりとで、たしかにそれを見とどけた。しかしみんなももう帰ってよかろう。粟はきつと返させよう。だから悪く思わんでおけ。一たい盗森は、じぶんで粟餅をこさえて見たくてたまらなかつたのだ。それで粟も盗んで来たのだ。はっはっは。」

そして岩手山は、またすまして空を向きました。男はもうその辺に見えませんでした。

みんなはあつけにとられてがやがや家に帰って見ましたら、粟はちゃんと納屋にもどっていました。そこでみんなは、笑って粟餅をこしらえて、四つの森に持って行きました。

中でも盗森には、一ばんたくさん持って行きました。その代り少し砂がはいつていたそうですが、それはどうも仕方なかったことでしょう。

さてそれから森もすっかりみんなの友だちでした。そして毎年、冬のはじめにはきつと粟餅を貰いました。しかしその粟餅も、時節がらずいぶん小さくなったが、

これもどうも仕方がないと、黒坂森のまん中のまっ黒な大きな岩がおしまいに言っていました。

日本文学電子図書館

狼森と筑森盗森

著 者：宮澤賢治

制作者：宮澤一郎

底 本：「どんぐりと山猫」

中央公論社

昭和24年3月5日 5版印刷

昭和24年3月10日 5版発行

日本文学電子図書館